地形地質と関わる災害地名

昭和コンクリート工業（株）　○中根洋治
エイトン（株）正会員　国際会員　可児幸彦
奥田建設　奥田昌男
各務原市　正会員　国際会員　西村勝弘
名古屋大学　正会員　国際会員　中野正樹

１．はじめに

災害地をみると，地形地質と関わることが多く見受けられる。そこの地名も危険な場所を表わす場合が目立つ。昔の人達が崩れやすい所，浸水しやすい所など，身をもって経験し暮らしてきたので地名に残っていると思われる。地名のいわれは，その漢字と関係ない場合が多い。奈良時代の西暦 713 年に，地名は二文字の好字を用いるよう詔勅があったので当て字が多い。特に動植物を使った地名は，危険な場所を表すことが多い。ここでは，災害と地質地形が関わることを明らかにし，地名という別な角度から災害予防を論じる。

災害地名は，復旧した後でも、忘れたころにまた災害を受けやすい地名である。2011 年の東日本大震災や紀伊半島水害などによる被災地には，災害地名がほとんどといえるほど連続している。地名に使われている漢字は，字面だけを注目しては間違えるもとである。ここでは，そうした災害と関わる地名の沢山ある中から「あいうえお順」に抜書きしてみる。

２．地名に見られる災害の概要

板（いた）；土地が崩れ痛々しい所。痛手を受けやすい土地。板所（いたしょ）は**写真**-1 のように濃尾地震で岐阜県根尾の崩れた山腹の地名で，その土砂が根尾川を塞いだ。**図**-1 を見ると，板所字崩谷・兎田・溝田（みぞんだ）と災害地名が連続している。ウサギは塞ぐ地形を表わす。また蛇抜という沢もこの図にあるが，蛇抜については後述する。根尾地区の断層近くに，このほかにも板屋（いたや）という所がある。大分県のオオイタでも、川が段丘を切り刻むことといわれる（楠原佑介氏談）。

芋川（いもがわ）：埋もれる川。長岡市東竹沢地区の芋川は 2004 年の新潟県中越地震で崩土により埋まった（**写真**-2）。刈谷市今川町の旧名は芋川で，境川・発杭川と逢妻川に挟まれた地域になり，旧河道を埋

写真-1 根尾谷板所の崩土で川が塞がった
（明治 24 年、現地説明版より）

写真-2 東竹沢地区地すべりで芋川埋没
（湯沢砂防事務所提供）

The place names of disaster related to topography and geology: Yoji NAKANE (Showa Concrete Industries Co. Ltd.), Masao OKUDA (Okuda Construction Company), Yukihiko KANI (Eiton Co. Ltd.), Katsuhiro NISHIMURA (Kakamigahara City), Masaki NAKANO (Nagoya University).

めた形跡がある。イモは鋳物師（いもじ）のように鍛冶地名の場合もある。

猪越（いのこし）：川が越水した所。名古屋市中村区猪之越町は庄内川沿い。

牛（うし）：崩れやすい憂し所。豊川市牛久保（うしくぼ）は河岸段丘の場所。豊橋市牛川（うしかわ）町・知立市牛田も河岸段丘のある所。長野県松本市牛伏（うしぶせ）川は崩壊地であった（**写真**-3）ので、現在は 20 段の砂防堰堤が築かれている。佐賀県牛津川は蛇行した川。

牛牧（うしまき）：名古屋市瑞穂区牛牧町は，水が渦巻いていた所。岐阜県瑞穂市牛牧（うしき）も渦巻く所。

梅（うめ）：大阪の梅田は湿地帯を埋めた所。愛知県日進市の梅森は森を埋めた所。岐阜県山県市の梅原は、南の沢から土石流が流れ来て埋まった所。

太田（おおた）：水が覆う所。美濃太田は美濃加茂市の JR 中央線の駅名。中山道の太田の宿があった所。1983 年木曽川が氾濫して水害を受けた。愛知県東海市の大田町・太田川も低地。静岡県袋井市の西側を流れる川は太田川，ここもたびたび氾濫する。2015 年 7 月 16 日群馬県太田市で浸水被害があった。

押切（おしきり）：水が押し切って流れていた所。名古屋市西区押切町では，2008 年 8 月 29 日の大雨で多くの車が水没した。浸水したのは市内でここだけであった。この付近を笈瀬川（中川の上流）が流れていたが，現在は暗渠である。新潟県北蒲原郡（新発田市）の新荒川筋にもある水害地名。

押堀（おっぽり）：川の外側に残る池の名前。かつての堤防が切れた所。旧河川が流れていた場合が多い。1976 年の長良川決壊は，丸池という押堀のあった場所が破堤した。過去の破堤の記録が分からなくなった場合がある。押堀が無くても過去に旧河道を締め切った場所が破堤しやすい。

追波（おっぱ）：宮城県石巻市には，追波川という川があった。この追波川は，旧北上川と新北上川を結ぶようなほぼ水平の川。水位の高い方から流れた（石巻市文化財担当）。これが元で北上川の別名が「追波川」と呼ばれ、河口の湾が追波湾と称するようになったと考えられる。

岐阜県本巣市根尾に越波（おっぱ）という所がある。ここは「1287 年，地震により人家ことごとく潰れた。この時に中央の低い山を水波打ち越えたるをもって以後『越波村』と称す」[1] とのことである。

折立（おりたち）：奈良県十津川村折立では、2011 年の水害により桁下から水面まで 20m ある折立橋が流された。仙台市青葉区折立は東日本大震災で滅茶苦茶になった被災地。小牧三ツ淵字観音堂付近は、1891 年の濃尾地震で地割れが出来てから「折立（おりたて）」という行政区になった。岐阜市折立（岐阜大学南西、おりたて）は，地質資料によれば地下 35m まで粘土や砂の堆積した軟弱地盤の所。

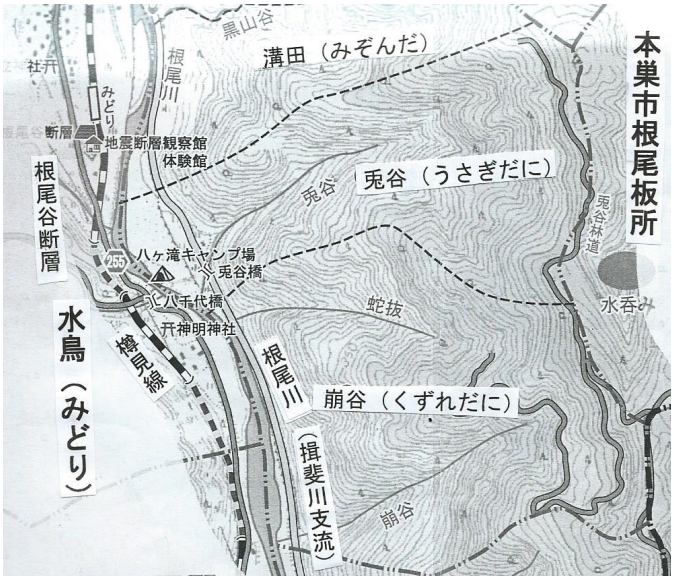

図-1 本巣市根尾板所の地図（『根尾ふるさと地名集』編集委員会，平成 20 年 3 月）

写真-3　長野県松本市、牛伏川上流（明治 24 年、現地説明版複写）

柿（かき）: 欠ける土地。岡崎市柿田町は台地下で，旧矢作川と伊賀川の合流点付近。安城市柿碕（かきさき）町は碧海台地の崖を含む地域で，その下方が矢作川流域の中でも代表的な後輩湿地である。新潟県柿崎町は砂丘のため不安定な所。

柏崎（かしわざき）:「柏」は傾（かし）ぐような地形に使われる地名である。2007 年 7 月 16 日，マグニチュード 6.8 の新潟中越沖地震が起きた。柏崎市内は砂丘群の上にあり，不安定な地域である（**図**-2)。この時，柏崎市荒浜の柏崎刈羽（かりわ）原子力発電所では液状化現象により，建屋が 1m の沈下や側方移動、変圧器のケーブルがショートして火災，室内クレーンの損傷，タンクとパイプの接合部のずれ，などが生じた[2)]。もう少し大きな地震が襲ったら爆発の危険があった。

2011 年東日本大震災の時に，栃木県高根沢町（宇都宮市に隣接した町）の上柏崎地区では，崖の崩落と地滑りがあった。

柏原：大阪府柏原（かしわら）市は，奈良盆地の水を集めた大和川が，「亀の瀬」という急流を通る。この付近は，粘板岩状で古代からの地滑り地であり，JR 関西本線は 1931 年の地滑りにより，線路が右岸から左岸へ付け替えられた。亀の瀬が埋まると奈良盆地は湖になる危険がある。今まで約 850 億円を投資して, 排水トンネル 7 箇所, 地滑り防止用の集水井 54 本(この中に世界最深 100m の集水井あり), 560 本の鋼管杭などを施した（**写真**-4)。「亀（かめ)」は「噛（か）む」からきた浸食地名でもある（小川豊説)。この地滑り地帯を含む地名が柏原市である。

2011 年の紀伊半島水害では、十津川村樫原（かしわら）と黒滝村柏原谷で深層崩壊があった。

カマ：釜石（かまいし)・鎌倉（かまくら)・塩釜（しおがま）などは，津波で浜辺が咬み取られた所。塩釜では塩は採れない（楠原佑介氏談)。諏訪湖の出口は「釜口」だが，ここは湖水で削り取られた地形。

釜笛（かまぶえ）: 岐阜県大垣市の南端。大垣市は各地に自噴水があった。自噴水が吹き出る時に音が出た所といわれる。

楠（くす）: クスは崩れるの意味をもつ。新城市大野字下楠（しもぐす）で，平成 22 年 3 月に道路拡幅工事のため標準勾配で切り取った斜面が二度にわたって崩れ，道路を川側へ移した。地名を守る会の代表者である楠原佑介氏の先祖は 260 年前，裏山が崩れて家が埋没したので苗字を「新家」から「楠原」に変更した（本人談)。

ギロ：泥深い湿地。豊橋・田原・豊川方面に 6 箇所。岡崎市明大寺町儀路，新堀町字ギロ，若松町下ギロ・ギロ川，旧日名村ギロ，小牧市多気字義領。愛西市葛城町ギロ。ギロのもとは「嫌（きろ）う」，嫌われる土地ということになる。愛知県内に 30 箇所ほどある。

図-2　400 年前は沼地帯だった柏崎地区
（新潟県地名研究会提供）

写真-4　柏原市の地滑り区域にある
集水井と亀の瀬（右が下流）

九頭竜（くずりゅう）川：流域が崩れやすい川（**写真**-5）。龍も土石流が流れる様子を表す。

栗（くり）：2008 年，M7.3 の「宮城・岩手内陸地震」で県境の栗駒山からは土石流が流れ，中腹では 100m 余沈下崩壊した（**写真**-6）。これらの土砂崩壊の起きた地名は「栗原市（元栗原郡）」である。さて，この「栗」という地名だが，果物の栗とは関係なく「刳（く）る」という木地師がロクロで「くり抜く」，あるいは「えぐり取る」という「崩壊地名」である。7 名の死者行方不明があった栗原市の駒ノ湯温泉は，過去にも山崩れがあった所だといわれる。

2011 年の水害により，奈良県十津川村栗平で熊野川が埋まった。

愛知県にあったかつての葉栗郡は，1586 年の洪水で中央が削り取られ，現在の木曽川が出来た。新城市乗本栗衣（くりぎぬ）は中央構造線沿いの蛇紋岩の災害危険区域である。まれに栗の字がつく焼き畑地名もある。

桑（くわ）：クエ（崖をクエという），食ワル，で崩れる崩壊地名の場合がある。五泉市桑山は田畑が流出し，洪水に食われる意味（新潟県地名研究会）。豊田市（旧足助町）桑田和は土砂災害警戒区域で，2012 年 9 月調査時は崩壊防止工事中であった。沖積地の砂が加わる地形の場合もある。

坂巻（さかまき）：水が逆巻いて流れていた所。北名古屋市鹿田（しかた）の字名。岐阜市柳津町佐波にも坂巻があり，現在では坂巻運動場が残っている。あま市（旧甚目寺町）坂牧は五条川・庄内川の乱流地。

桜（さくら）：鹿児島県の桜島は炸裂する所。土地が裂ける所に使われることがある。

蛇抜（じゃぬけ）：蛇や竜は土石流が流れる姿を表わす。海津市蛇池は洪水に関わる土地。

さる：流れ去るのサル。猿倉（さるくら）岳は旧山古志村の崩れやすい山。愛知県の猿投（さなげ）山の「猿」は明和の洪水で大量の花崗岩の風化したサバ土が流下した意味。「投」は山崩れの薙（な）ぎを表わす。断層が猿投山の南側と北側にあり，この山が隆起したことが分かる。岐阜県山県市梅原の申子（さるこ）川は崖錐が堆積した所。畑の中から上流の砂礫が出土する。

但馬（たじま）：多治見市と同様に，水が“たじろぐ”所。かつての但馬は現在の豊岡市付近だが，そこは海抜ゼロメートル地帯（**写真**-7）。掘れば海貝が出る。

南木曽（なぎそ）：長野県木曽郡南木曾町は，崩れやすい薙（なぎ）の多い奈岐蘇岳から昭和 36 年に名づけられた。それまでの町の中心は三留野（みどの）と呼ばれた。1844 年，112 人の尾張藩の木こりが働いていたところ，大雨による土石流により 99 人が亡くなった記念碑がある（**写真**-8）。遺体が集まったこの付近は「蛇抜け」と呼ばれる。1953 年には 3 人。1969 年には 6 人。2012 年には梨子（なし）沢で中学生が 1 人死亡している。ナシ沢は，流れて何も無くなってしまうこと。大雨による土石流は「蛇抜け」といわれ，梨子沢から二つ下流の沢が「蛇抜け沢」である。

写真-5　九頭竜川沿川は崩れやすいいたる所に落石防護工がある

写真-6 栗原市の崩れ（アジア航測）

写真-7 豊岡市街は円山川の水面より低い

写真-8 蛇抜けの石地蔵

南木曽町一帯は，屏風山断層の北部にあたり，花崗岩の風化地帯である。

ハギ：萩，萩原など。土地が剥（ハ）がれる所。一宮市萩原、岐阜県下呂市萩原町。愛知県阿久比（あぐい）町萩は，川の左岸側で背面は粘土の台地。荻も同様であり，愛知県幸田町荻では役場の職員が標準の道路切り取り勾配で地元説明した折、地元から「当地の場合に限りその勾配では崩れる」といわれ，設計変更を余儀なくされた。

ハバ：名古屋市西区幅下，各務原市羽場（**写真**-9）・小牧市巾下などのハバは，崖や段丘を表わす。

深志（ふかし）：長野県松本市の旧名。深志湖だったので深瀬から深志になり，さらに松本になった。松は冬でも緑色をしており，縁起のよい木である [3)]。松本城は軟弱層に建っており，基礎は栂（つが）の径 30cm の杭を 16 本打ち，その上に井桁を組んである。さらに外回りに，はみ出し防止用の杭が柵状に打ってある [4)]。

深瀬（ふかせ）：岐阜県山県市に東深瀬・西深瀬という所がある。根尾谷断層は三田洞・梅原・根尾谷断層の 3 本あり，そのうちの梅原断層を境にして，南側の高富は地表下すぐに栗石が堆積し（**写真**-10），北側の両深瀬は一変して 40m 下までシルト（御岳火山灰を含む）・砂・粘土層である（**図**-3，**図**-4）。北側が地震のたびに沈下を継続している所で，濃尾地震では約 2m 沈下したために市役所一帯の排水は鳥羽川へ入らなくなり，サイホンで鳥羽川の下を潜り下流で排水している。

保木脇（ほきわき）：ホキ・フキ・ホケ・ハコなども急峻な地形にある地名。2017 年 3 月 17 日，岐阜県美濃市保木脇の崖下へ乗用車が落ちて幼児が亡くなった（新聞ニュース）。報道写真を見ると崖の中腹に設けられた道路から下の川淵の岩場へ落ちた。岐阜県白川の庄川沿いは地盤が崩壊しやすい。そこにも保木脇がある。函館・箱根も急な山腹のある地形である。

ホケ：崖地名。岡崎市生平（おいだいら）町に字保毛，大保毛がある（**写真**-11）。第 2 東名と男川が交差する付近。県道沿いの山腹が崩れそうな所である。新城市作手善夫字ホケなどもある。徳島県の大歩危・小歩危もホケ地名である。

写真-9 岐阜県各務原市羽場（はば）の崖

写真-10 岐阜市太郎丸新屋敷の骨材採取地

図-3　山県市ボーリング位置図（⑨～⑫）

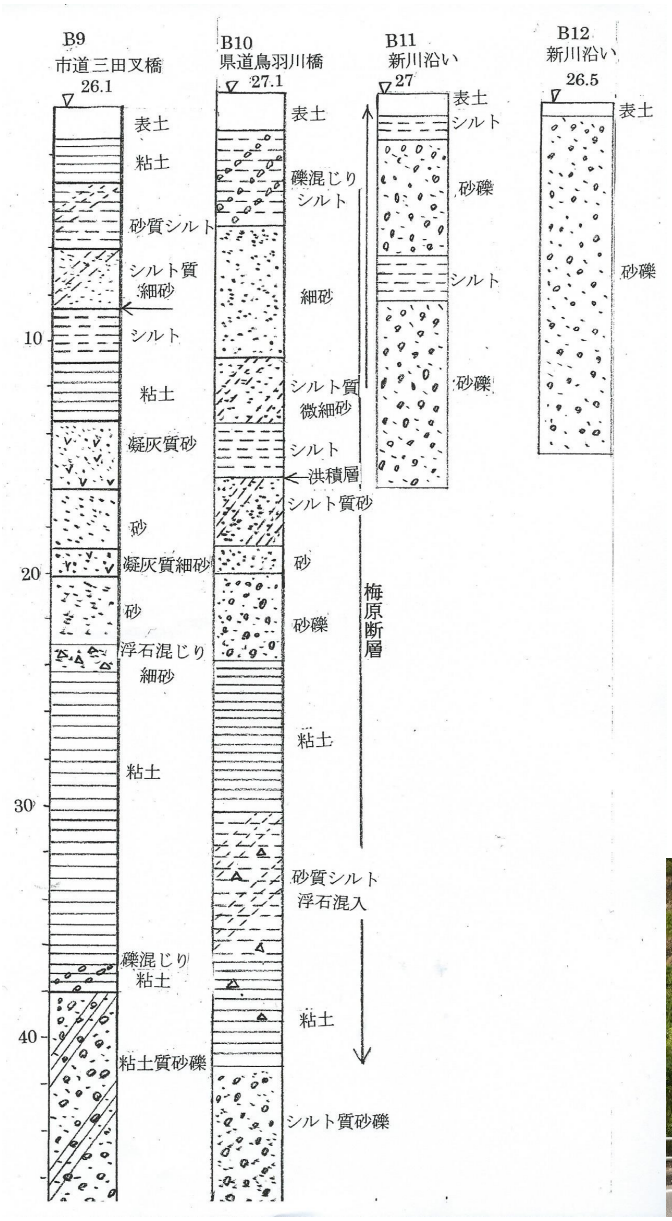

図-4　山県市ボーリング柱状図 [5)]

写真-11　岡崎市生平町字大保毛

船越（ふなこし）: 紀伊半島の志摩市船越（図-5）は，英虞湾の奥にある戸数 500 戸ほどの標高 1m 弱の集落。安政地震のとき，堤防が切れ，太平洋側の船が津波で英虞湾へ越してきた。その後，引き返しで英虞湾の水が太平洋へ流れ出た。もっと古くからの千人塚があり，今でも人骨が出てくる。昔の地名は大津波（おおつば）村だった（向出安孝町内会長）。

西隣の南伊勢町にも藤原宮の木簡にある船越がある。中津半島の付け根である。標高 5m ほどのくびれた部分を津波と共に船まで越えた所，と元船乗りの阪本多助さん（83 才）に聞いた。

岩手県山田町の船越も半島の付け根で，東日本大震災で船越湾から津波が越え[6]，山田湾では 900 人の方々が亡くなった。

和歌山県有田市の船越は，半島のくびれた部分の標高は 20m くらいである。左の太平洋側は崖なので，人が船を移動させることは不可能な地形である。したがって，ここでも船越は津波で船が越えてしまった所ということになる。

船越地名は全国に沢山ある[7]。川船のように船底が平らな場合は，人が船を運んだ所もあり得る。

藪（やぶ）: 土地が食い破られる所。岐阜県安八郡輪之内町大藪は，長良川から大榑（おおぐれ）川が分流する所。根尾川が洪水により，船来山の北側から南側へ移ったころは「藪川」といわれた。岡崎市藪田（やぶた）はかつての矢作川が流れていた所。

和田（わだ）: 周りが水に囲まれた所。水がわだかまる所。岡崎市に上和田町・下和田町がある。これらは矢作川の旧河道が流れていた所。西尾市大和田は矢作古川と広田川に挟まれた土地である。長野県和田峠は北側に和田の集落がある。この集落は中山道の宿場で，川の合流点である。

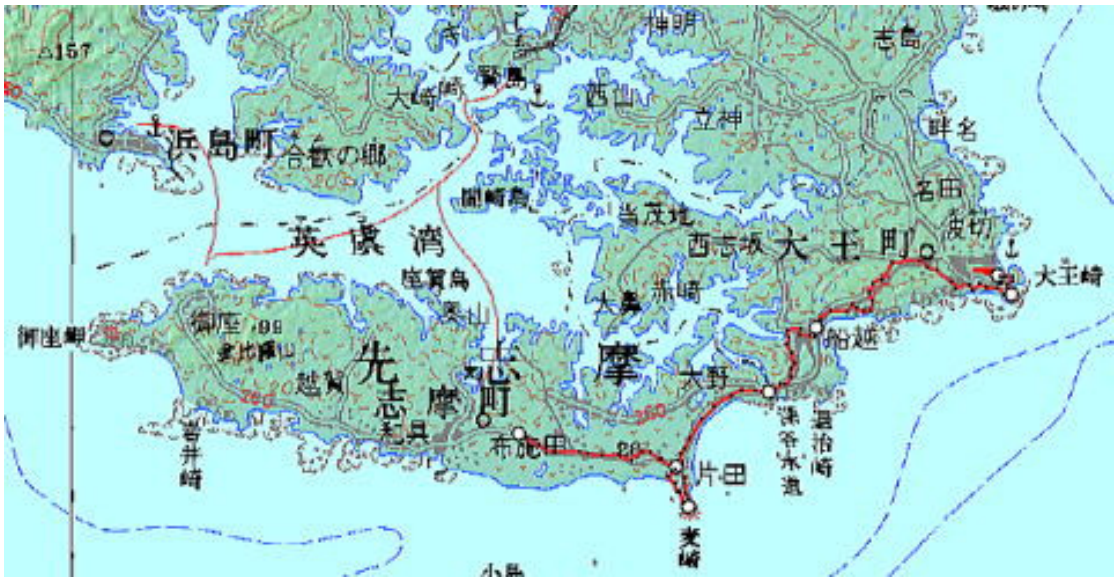

図-5 三重県英虞湾の奥にある志摩市船越（「大王町」の下）

3. まとめ

災害地名は，記録にない災害が地名に残っている場合がある。三重県南伊勢町の船越のように，飛鳥時代からの地名は，記録が無いそれ以前の津波によって出来たものである。近年災害が無いようでも，災害地名の場所は他の場所より要注意の確率が高い。

災害危険地域の推定には，地質調査・地盤調査などの他，本稿に挙げたような災害地名も参考にされるならば好ましいと思われる。

参考文献

１）根尾ふる里地名集（2008.3）『根尾ふる里地名集』，p.215.
２）土木学会（2007.10）「土木学会誌」，p.51.
３）信濃毎日新聞社（1975）『新しなの地名考』，p.219.
４）松本史談会（1953）『信濃安筑史談』，pp.40-41.
５）中根洋治（2011）『秋葉古道と愛岐地方の旧河道』，p120.
６）遠藤宏之（2013）『地名は災害を警告する』，p.67.
７）中根洋治（2016）『紀伊半島ひろい歩き』，pp.40-45.